



バッハの森通信

第112号
2011年
7月20日発行

財団法人筑波バッハの森文化財団

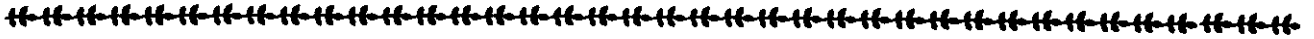
〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9

<http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699

e-mail: info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 (財)筑波バッハの森文化財団



静かにささやく声

クラヴィコードの響き

自分の魂と対話をするための楽器だという説明が分かったような気がしました。

* * *

クラヴィコードという楽器をご存知ですか。去年の秋、バッハの森でオルガンを教えていただけなかったか、宮本とも子さんと話し合いを始めたときに、彼女がクラヴィコードの演奏・研究・普及に、30数年来、熱心に努めてこられたことを知りました。お話しをうかがっているうちに、クラヴィコードという古楽器が、バッハの森の活動のレベルアップに大変有効だと思えるようになり、早速、正月早々、アメリカのキース・ヒル工房に発注しました。

こうして4月末に到着した楽器で、5月から宮本さんのクラヴィコード・レッスンが始まりました。アーレント・オルガンが大地震で大破するとは夢にも思っていなかったときの決断でしたが、時機を得た結果になったと思っています。

* * *

去る6月26日のバッハの森コンサートは、アーレント・オルガンがまだ修復されていないため、オルガンなしのコンサートになりました。少々淋しかったことは否定できませんが、宮本さんが演奏するクラヴィコードが入って、これまで経験したことのない瞑想的な雰囲気を楽しむことができました。

ピアノに始まって聴こえなくなるまでの音量だが素晴らしい表現力をもつ楽器、という宮本さんのご紹介通りでした。小さな雑音でもかき消されてしまう響きを一音も聞き漏らすまいと、皆さんが聞き耳をたてていたため、奏楽堂はシーンと静まりかえっていました。

当然、最高の演奏と良い楽器、それに奏楽堂の優れたアコースティックに助けられたのですが、クラヴィコードは他人に聴かせるというより、演奏者が

ピアノに始まって聴こえなくなるまで、一音一音表現豊かなクラヴィコードの響きに聴き入りながら、私は、紀元前9世紀にイスラエルで活動していた預言者、エリヤが聞いた神の声を思い出していました。異教の預言者団と激しい闘争を繰り返して、フェニキヤ出身の王妃イゼベルの怒りをかい、命からがら荒野に逃げ込み、絶望のあまり自殺まで考えた預言者は、天使に助けられて神の山ホレブにたどりついたとき、「主の前に立て」という声を聞きます。

「見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。激しい風が山を裂き、岩を砕いたが、風の中に主はおられなかった。次に地震が起きたが、地震の中に主はおられなかった。次に火が起こったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた」。

この「静かにささやく声」が神の声だったのです。この物語は、正義を追求して激しい闘争に明け暮れている間に、いつしか神の声を聴こえなくなっていた預言者が、再び神の声を聞いたときの経験を伝えています。大震災を経験して、物質的豊かさばかり追求してきた生き方を反省している私たち日本人が、考えるべき示唆に富んだ物語ではないでしょうか。皆さん、静かにささやくクラヴィコードの響きを聴きに、バッハの森にいらっしやいませんか。

なおこのクラヴィコードを購入するために、180万円かかりましたが、その原資は、数年前に匿名希望の方から、何にでもお使いください、と言われていただいたご寄付です。これをバッハの森の一般会計に入れると何となく消えてしまうので、私が個人でお預かりしてありました。その方に改めて感謝すると共に、あのご寄付が、それに相応しい「静かにささやく響き」になったことをご報告します。

(石田友雄)

主の憐れみ

ミゼリコルディアス・ドミニ

*このメディタツィオは、バッハの森コンサート(2011年6月26日)で朗読されました。

本日のコンサートのテーマ、「主の憐れみ」は、ラテン語で「ミゼリコルディアス・ドミニ」と申します。復活祭後2番目の日曜日の名称で、「主の憐れみを永遠に私は歌おう」という詩篇89篇冒頭に由来します。この言葉は、一見、この詩篇が神の憐れみを受けている幸福な人の歌であると思わせますが、53節に及ぶ長い詩篇を終わりまで読んでいくと、実はこの詩人が、神の怒りにおびえ、姿を隠した神に向かって、必死に助けを叫び求めていることが分かります。

主よ、いつまで永遠に隠れておられるのですか。
いつまであなたの怒りは火のように燃え盛るのですか。

思い出してください、私がいつまで生きていられるのか。

あなたは人間を空しい者として創られたのです。
死なない人がいるでしょうか。

あなたの昔の憐れみはどこにいったのですか。

そして、廃墟となったかつての都、周囲の諸民族に略奪され、笑い者にされている屈辱など、敗戦の苦しみを切々と訴えます。この詩篇の歴史的背景は、紀元前6世紀に起きたユダ王国の滅亡とバビロン捕囚です。神に永続を約束されたはずのダビデ王朝が断絶し、不滅の都だと信じていたエルサレムが廃墟になったときに、怒った神に見捨てられたと悟った詩人が、神の憐れみを取り戻そうとして、「主の憐れみを永遠に私は歌おう」と歌いだしたのです。

崩れ去った神話

3月11日に起こった東日本の大震災と原発事故を、バビロン捕囚という世界史的大事件と直接比較することは、すべての状況が余りにも違うので難しいかもしれません。それでも、400年も続いたダビデ王朝と王都エルサレムの存続が、自分たちは神に祝福され、神の憐れみを受けた特別な民

族だという不滅神話を生み出した状況と、戦後70年近くも平和と繁栄を享受し、世界一の長寿社会を達成した日本人が、優越感と安全神話に酔いしれていた姿には相通じるものがあります。古代ユダ王国の人々が誇った不滅神話も、現代の日本人が抱いた安全神話も、一瞬にして崩れ去ると、どちらの神話も実際は脆弱な土台の上に積み上げられた独りよがりすぎなかったことがはっきりしたことも、似通っているではありませんか。

3ヶ月前に、東日本各地の沿岸地方が一瞬にして瓦礫の山と化し、福島原子力発電所が壊滅的打撃を蒙って、広範囲に及ぶ放射能汚染を引き起こしたとき、あの大地震と大津波は想定外の天災だったと、国家の指導者や原発管理の責任者たちが言い訳しました。その後、「想定外」という言い訳は、大自然の力を甘く見た結果にすぎないと、多くの人たちに批判されました。全くそのとおりだと思います。しかし、今、私は「天災」という言葉に注目します。

言葉というものは、古代の人々によって創り出され、現代に至るまで継承されてきた文化遺産です。当然、時代とともに人々は多くの言葉の本来の意味を忘れてますが、それでも使い続けます。「天災」は「天気」とともに、この種の言葉の良い例です。現代の日本人は、「天災」を「自然災害」、「天気」を「気候」の意味で使います。しかし、本来「天」とは、「神」乃至は「神々」の婉曲な表現でした。古代日本人は、「神々が下した災害」を「天災」、「神々の気分」を「天気」と呼んだのです。従って、3ヶ月前の大震災を古代日本人の語法によって「天災」と呼ぶことは、2600年前に、敗戦の苦しみを、「怒った神」が下した罰と考えた詩人と同じ災害理解であることが分かります。

しかし、現代人なら誰でも、あの震災が「神の怒り」によって引き起こされたという説明には抵抗を感じるでしょう。それでは、「神の怒り」と対極の「神の憐れみ」についてはどうでしょうか。極限の苦しみの中で「主の憐れみを永遠に私は歌おう」と歌い出した詩人は、何を考えていたのでしょうか。

命は不思議

問題は、大震災を通して改めて考えさせられた人間の命です。世界一の長寿社会で平穏に暮らしていたとき、私たちは、自分と自分の周囲の人たちが生きているのは当たり前のことであり、死は

異常事態だと考えていました。しかし、3万人近い人の命が一瞬にして失われた大災害が身近で起こったとき、生きていることは決して当たり前ではないことが、改めて知らされました。一緒に大津波に襲われた家族や友人や同僚が、紙一重の差で生き残った人と押し流された人に分かれた話を聞くと、いよいよ生きていることが決して普通のことではないことがよく分かりました。要するに、命があるということは、不思議なことなのです。

生きていることが不思議だと思ったときに、危機的な状況の中で、「主の憐れみを永遠に私は歌おう」と歌った詩人の心が見えてきます。彼は、多くの同胞が死に、捕囚されていった後の廃墟と化したかつての都で、生きている自分を発見しました。そして、生きている証しとして、カタストロフからの復興を願い求めました。命も、復興も、彼によれば「主の憐れみ」によって与えられるものなのです。「人間は死ぬものです。死ぬ前にあなたの憐れみを、復興を示してください」という彼の言葉には、現代人である私たちも同感できます。古代人同様、私たちも人間の命の限界を知っています。たとえ「主の憐れみ」という表現に抵抗を感じる人も、結局、命を、人間の力でコントロールできないことは認めざるをえないからです。

ともかく、限界ある命が、今、生きているということは、不思議なことなのです。この状況を、三千数百年前に、エジプトから脱出したユダヤ人の先祖は、命は死に打ち勝って生きている。ただし、そのためには他の命の犠牲が必要だ、と理解しました。これが過ぎ越し祭の意味です。

復活したイエスの弟子たち

ところで、2000年前に、過ぎ越し祭が伝える命の不思議を再解釈して、より普遍的な説明を世界中に広めた人々が現れました。ナザレのイエスの弟子たちです。彼らは、ローマの占領軍から民族を解放するメシアだと期待してイエスに従いました。しかし、彼は何の抵抗もせず、十字架につけられて処刑されてしまいました。当然、弟子たちは、ちりぢりに四散しました。ところが、彼の死が過ぎ越しの小羊のように、命が死に打ち勝つための犠牲だったと理解したときに、イエスの弟子たちは、死んだイエスは復活したと言いだしたのです。これが復活祭の始まり、キリスト教という宗教の始まりです。

その後、イエス・キリストの復活は神秘的な物語になり、教会は、一つの命の犠牲によって他の命が死に打ち勝って生きる、という命の不思議を、

「十字架の贖い」という神秘的な教義によって伝えてきました。この教義が、人々に命の不思議を伝えてきたことは事実です。それにもかかわらず、古代人とは別世界に生きる現代人には、このような神秘的な説明では、イエスの弟子たちが本当に伝えたかったことが分からなくなりました。

はっきり申します。私たち現代人が常識とする科学的理解のレベルで語るなら、復活したのは十字架で処刑されて死に、埋葬された、ナザレのイエスではありません。彼が息を吹き返したわけではないのです。あの時よみがえったのは、イエスの弟子たちだったのです。ナザレのイエスという類い希な崇高な人格に魅了され、彼に付き従った弟子たちが、一旦は四散しましたが、愛する人の忘れたい思い出に靈感を受け、自分たちは生きている、と改めて自覚したときに、死に体だった彼らは復活したのです。

これは、紙一重の差で自分は生き残ったが、愛する者を失った被災者の皆さんの経験と相通じるものがあるのではないのでしょうか。彼らが、目の前で亡くなった愛する人たちを弔い、悲しみから立ち上がって、亡くなった人たちの分も自分は生きなければならないと決心したときに、亡くなった人たちが彼らの中で復活したと感ずいても不思議ではありません。

憐れみに追いかけて生きる

これから、詩篇23篇に基づくコラールを2曲、ご一緒に斉唱します。この詩篇は神を羊飼い、人間を羊の群にたとえます。羊飼いと羊の関係は、私たち日本人には全く異文化の世界ですが、羊が生きていくために必要なものを全て備える人、あらゆる危険から、時には自分の命を犠牲にしてまで羊の命を守る人、そのような羊飼いを信頼して羊はついていく、という状況を想像してください。このような羊飼いと羊の関係を描くことによって、この詩篇は神の憐れみによって生かされる命を歌っています。そして、「私は一生神の憐れみに追いかけて生きる」という面白い表現によって、命がある限り生きることを神が望んでおられるという全面的な信頼を告白します。これは「主の憐れみを永遠に私は歌おう」という詩篇89篇の詩人の思いと同じことです。

今日のコンサートが、命の不思議について、いや自分が生かされていること不思議について、ご一緒に改めて考えてみる契機になることを期待しております。

(石田友雄)

「バッハの森通信」楽しみにしています

2011年6月18日
カトマンズ、ネパール

友雄先生

長い間、ご無沙汰しておりますが、いかがお過ごしでしょうか。3月の東日本大震災のときには、バッハの森ではアーレント・オルガンが大きく破損したとのこと、バッハの森のホームページで拝見して知りましたが、本当に胸が痛みます。アーレント・オルガンと言えば一子先生・・・と、私の中では1本の糸でつながっていて、懐かしいシーンが次々と思い出されます。丁度、夫のネパール行きの準備が大詰めの頃だったので、お見舞いもせず大変失礼いたしました。いつの日かきっと修理を終えて、あの美しい音色を再び聴けるものと信じています。

本日、インターネットにより、バッハの森の年会費とオルガン修復のための寄付を送金させていただきました。ネパールは郵便の集配システムがなく、郵便ポストもありません。希望者は郵便局に私書箱を設置して、各自取りに行かなければなりません。うちの場合はJICA事務所宛の私書箱なので、夫の名前をお願いします。日本では、江戸の昔から飛脚が活躍していたというのに、考えられない能率の悪さです。このような国にいて、これから「バッハの森

通信」を定期的にいただけるのはとても楽しみです。皆様によろしくお伝えください。(小嶋しのぶ)

友情コンサートをしてみました

2011年6月29日
横浜市

バッハの森の皆様

先日はコンサートに参加せず、申し訳ないことをいたしました。横須賀と友好都市の会津若松市から友情コンサート開催の依頼があり、横須賀合唱連合合唱団のメンバーとして、夫ともども訪問してきました。試練に打ち勝つという内容の、團伊玖磨の組曲「横須賀」を演奏し、お客様を巻き込んで「ふるさと」などを歌い、「会津磐梯山」を踊り、義援金を市長に直接手渡すなど、交流を深めてきました。原発事故のため避難されている方々も来てくださったようです。当然、会津若松市は津波の被害は受けませんでした。お城の石垣が崩れたり、公共建造物の屋根が落ちていたり、何よりも風評被害のため観光客が少ないということでした。私たちも福島のも産を購入したりして、ささやかな協力をしてまいりました。一泊のバス旅行で、メンバーの皆様と楽しいひとときを過ごすことができました。(三縄啓子)

寄付者芳名 (敬称略日付順) (2011.4.21 - 6.26)

下記の方から計11,200円のご寄付をいただきました。

オルガン修復募金寄付 (2011.4.15 - 6.26)

下記の方々から計1,525,000円のご寄付をいただきました。

建物維持積立寄付 (敬称略日付順)

下記の方々から計80,000円のご寄付をいただきました。

地上権更新積立寄付 (敬称略日付順)

下記の方々から計12,000円のご寄付をいただきました。

2010年度・統計

集会回数・参加者延べ人数
(2010. 4. 1～2011. 3. 31)

会員数 (2011. 3. 31現在)

維持会員	90人
賛助会員	56人
計	146人

学習コース	回数	延人数
クワイア (混声合唱)	34	562
クワイア・ワークショップ	2(5日)	51
ハンドベルクワイア	32	206
声楽アンサンブル	20	126
教会音楽セミナー	35	204
入門講座：聖書を読む	30	209
聖書ヘブライ語	19	122
コラールを読む	2	7
コラールを歌う	3	23
教会歌を学ぶ	16	127
レチタティーヴォを歌う	8	49
オルガン鍵盤和声	24	115
オルガン教室	31	96
オルガン練習	391	391
ポジティブ練習	2	2
クリスマス祝会	1	23

会計報告 (2010年度) 単位：千円

全体 (指定寄付金を除く)

収入の部	
前期繰越	1,786
財産利息	9
維持・賛助会費	1,022
寄付	2,134
事業収入	3,986
雑収入	408
計	9,345
支出の部	
事業費	7,636
管理費	818
次期繰越	891
計	9,345

* * *

公開プログラム

コラールとカンタータ	28	405
コンサート	3	118

運営活動

運営委員会	32	125
評議員会	1	6
理事会・評議員会	2	21
評議員選定委員会	1	6
大掃除	1	11
クリスマス人形飾り付け	3	11
オルガン調整・点検	3	5

指定寄付金 (建物維持) 増減

収入の部	
前期繰越	3,321
寄付	1,163
利息	4
計	4,488
支出の部	
建物補修	2,789
次期繰越	1,699
計	4,488

* * *

その他

結婚祝賀リハーサル	1	10
結婚祝賀会	1	48
他団体向けセミナー	1	7
見学	2	11
来訪	4	10
計	733回	3107人

指定寄付金 (地上権更新) 増減

収入の部	
前期繰越	666
寄付	250
計	916
支出の部	
次期繰越	916
計	916

入退会者数 (2010年度)

	入会	退会	増減
維持会員	6	24	-18
賛助会員	3	3	-0
計	9	27	-18

2011. 3. 31現在

長期借入金 (一般)	34,560
長期借入金 (建物維持)	5,160

- [3. 26 理事会・評議員会 財団法人筑波バッハの森文化財団 出席者12名]
- 4. 2 発送「初夏のシーズンのご案内」改訂版 5名。
- 4. 7, 14, 21, 28 運営委員会 各参加者4名。
- 4.15 開講 初夏のシーズン
- 4.29 到着 クラヴィコード
- 5.12, 19, 26 運営委員会 各参加者4名。
- 6. 2, 9, 16, 23, 30 運営委員会 各参加者4名。
- 6.10 クラヴィコード特別講習会 参加者6名。
- 6.24 見学 建築研究開発コンソーシアム 3名。
- 6.26 バッハの森コンサート 参加者35名。
- 7. 2 理事会・評議員会 財団法人筑波バッハの森文化財団 出席者9名。

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ コラール・カンタータ研究 コラールとカンタータ (JSB)

- 4. 16 復活祭第1祝日のためのカンタータ「キリストは死の縄目につき」(BWV 4) ; コラール「主は死の縄目に」。オルガン: J. S. バッハ「私たちは食べて生きる」(BWV 4/8)、安西文子。参加者16名。
- 4. 23 第322回、オルガン: 海東俊恵。参加者14名。
- 5. 7 クワジモドジェニティのためのカンタータ「イエス・キリストを記憶にとどめよ」(BWV 67) ; コラール「輝くこの日を」、「平和の君なるイエス・キリスト」。オルガン: J. S. バッハ「素晴らしい日が現れた」(BWV 67/4)、「あなた、平和の君、主イエス・キリストよ」(BWV 67/7)、當眞容子。参加者12名。
- 5. 14 第323回、オルガン: 笠間きよ子。参加者13名。
- 5. 21 ミゼリコルディアス・ドミニのためのカンタータ「あなた、イスラエルの羊飼いや、聞いてください」(BWV 104) ; コラール「主はわが飼いや主」。オルガン: J. S. バッハ「主は私の誠実な羊飼いや」(BWV 104/6)、海東俊恵。参加者8名。
- 5. 28 第324回、オルガン: 當眞容子。参加者17名。
- 6. 4 ユビラーテのためのカンタータ「泣き、嘆き、憂い、怯え」(BWV 12) ; コラール「み神のみ業は」。オルガン: J. S. バッハ「神がなさること、それは善くなされています」(BWV 12/7)、當眞容子。参加者13名。

- 6. 11 第325回、オルガン: 笠間きよ子。参加者17名。
- 6. 18 聖霊降臨祭第1祝日のためのカンタータ「私を愛す者、彼は私の言葉を守るであろう」I (BWV 59)。コラール「聖霊の主、来たれ」。オルガン: J. S. バッハ「来てください、聖霊よ、主なる神よ」(BWV 59/3)、海東俊恵。参加者14名。
- 6. 25 第326回、オルガン: 安西文子。参加者13名。

学習コース

- バッハの森・クワイア (混声合唱) 4. 16/16名、4. 23/13名、5. 7/17名、5. 14/13名、5. 21/11名、5. 28/16名、6. 4/14名、6. 11/15名、6. 18/15名、6. 25/15名。
- バッハの森・ハンドベルクワイア 4. 16/4名、4. 23/4名、5. 7/4名、5. 14/5名、5. 21/4名、5. 28/6名、6. 4/4名、6. 11/5名、6. 18/5名。
- コラール研究会 4. 15/6名、5. 6/6名、5. 20/5名、6. 3/6名、6. 17/7名。
- クラヴィア研究会 4. 15/6名、4. 22/2名、5. 6/6名、5. 20/5名、6. 3/5名、6. 17/5名。
- オルガン音楽研究会 4. 22/7名、5. 13/7名、5. 27/8名、6. 10/9名、6. 24/7名。
- 入門講座: 聖書を読む 4. 16/8名、4. 23/8名、5. 7/8名、5. 14/6名、5. 21/8名、5. 28/8名、6. 4/7名、6. 11/7名、6. 18/8名、6. 25/6名。
- クラヴィコード、ポジティブ&チェンバロ練習
 - 4. 1/1名、4. 2/1名、4. 5/2名、4. 6/1名、4. 9/1名、4. 13/2名、4. 14/2名、4. 15/1名、4. 16/1名、4. 19/1名、4. 20/1名、4. 21/1名、4. 22/2名、4. 23/1名、4. 26/1名、4. 27/2名、4. 28/1名、4. 30/1名、5. 6/3名、5. 7/2名、5. 10/2名、5. 11/2名、5. 13/2名、5. 14/3名、5. 17/2名、5. 18/1名、5. 20/3名、5. 21/4名、5. 24/2名、5. 25/1名、5. 26/1名、5. 27/3名、5. 28/1名、5. 31/3名、6. 1/2名、6. 2/1名、6. 3/2名、6. 4/2名、6. 7/4名、6. 8/3名、6. 10/2名、6. 11/2名、6. 14/2名、6. 15/3名、6. 16/2名、6. 17/1名、6. 18/2名、6. 21/4名、6. 22/1名、6. 23/2名、6. 24/2名、6. 25/2名、6. 28/2名、6. 29/1名。